



男女對抗

去勢

地下闘技場2

玉子王子 著

1章 家具が武器になるといったでしょう？ 腹を机と壁に挟まれ、キ〇タマ防御が不可能に

砂敷きの円形闘技場。

周りは木の板の壁で、客席はいくらか高く、そこに置かれた椅子に座って客が格闘場を見下ろす形。

「本当に女ばかりだな」

客席を見回しながら、細マッチョの男。

田淵徹。

トオルという名は、有名なボクシング漫画の選手から取られた。

父がボクシングファンだったので、彼も幼い頃からボクシングを習い始めた。

というか習わされたのだが、成長するにしたがって体格もよくなり、運動神経もよかったのでプロになって、そこそこ勝ち上がった。

しかし、チャンピオンになるまでには行っていない。

同時代に強い選手がいなければ、なれるかなれないか、田淵はそのぐらいの立ち位置だった。

チャンピオンでもバイト暮らしという話がよくある日本ボクシング界なので、そこそこ強いぐらいではもちろんそれで食ってはいけない。

彼は恋人にぶら下がり、金を作ろうと思えば借金して競馬にチャレンジというすでに転落しているような人生を送っていた。

恋人に文句を言われるとボクシングで鍛えた拳がモノを言うというDV男でもある。

競馬はそこそこ当たるものの、不思議と金にならず、今や借金が五百万。

もう恋人をソープにいかせるしかないかと、どうしようもないことを考えていたある日、胡散臭い女が尋ねてきた。

格闘技の試合に出てくれれば借金を肩代わりしてくれるという。

そして、その試合は一回のファイトマネーが負けても百万、勝てばプラス三百万だという。

殴ろうかと思った。

あまりにも胡散臭い。

しかし、何かあれば力で切り抜けられる自信が在る田淵は話を聞き、どうも本当らしいと確信した。

二回も勝てば借金はチャラだし、さらに戦い続ければ金持ちになれる。

話が上手すぎる。

だが、聞けば納得した。

その試合はある種の見世物なのだ。

男女が戦う。

それだけだと、もちろん男が圧勝するに決まっている。

だから、一つ普通の格闘技試合ならありえないルールがある。

それは金的ありというルールだ。

男の急所を攻撃していいということ。

下手に負けると、玉を潰されかねない。

ナノテクノロジーで普通の薬なら一日寝ていれば玉は治る。

最新のものなら十秒。

この地下闘技場では、その最新のものが使われるという。

何回潰されてもすぐ治ります、とのことだ。

それを聞いて、田淵はほくそえんだ。

——なるほど、キ〇タマが惜しいから、普通の奴は二の足を踏む。だから選手が集まらないんだな。

それで、借金を肩代わりするという形で、実質借金のカタに無理矢理選手を集める。

そういうことなら、と田淵は試合を快諾した。

別に、男の肉玉が惜しくないわけではない。

というより、男なら「十秒で治ります」といわれても、絶対に潰されたくない。

田淵もその例に洩れない。

彼はただ、確信しているのだ。

たかが女と戦って、片金でも潰される事などありえないと。

「へ、女だぞ？ 何で女にキ〇タマやられるんだよ」

笑いながら、裸足の足で砂を踏む。

前には、建物。

闘技場の真ん中に、映画のセットのような建物が置かれている。

中の構造は大体聞いている。

四つの部屋。マンションか何かの住居を模したものだ。

そこの部屋をグルリと通り抜け、外に出れば田淵の勝ち。

そういう「設定試合」と呼ばれる戦いだという。

相手は、もちろん女。

そういう地下格闘場なのだ。

「間もなく試合開始です！」

バニーガール。

レフェリーだという。

田淵が部屋を移動すると、一旦試合中断、レフェリーである彼女が田淵のいる部屋に移ってから試合が再開される手筈。

なかなかオッパイも大きい美人だ。

「なあ、俺が勝ったらひと晩付き合わないか？」

「あら、いいですね」

微笑むバニーガール。

「おいおい、気前がいいな」

「うふふ、そうですか？」

バニーレフェリー、野城は内心笑いをこらえていた。

——勝ったらって……知らないって怖いわね……

チラ、と他の選手たちを見る。

彼女らも楽しげだった。

「田渕選手が勝ったら、喜んでお相手しますよ」

——でも……

一瞬だけ、田渕の試合用のブーメランパンツの膨らみを見る。

——この闘技場で、男が勝ったことはまだ一回もないんですけどね。エッチの予約よりタマタマの心配した方がいいですよ、絶対。

別に男が負けるようにインチキがなされるわけではない。

ただ、そもそも男が勝てないぐらいのバランスのカードが組まれるというだけだ。

……それは目に見えるインチキよりえぐいかもしれない。

今回の場合は、男がプロボクサーである分のバランスは人数で取られていた。

居並ぶ水着姿の女性たち。

田渕より少し年上の、主婦たちだった。

「今回は設定試合！ 設定は浮気がばれた男が恋人たちに袋叩きにされるというもの！ 四つの部屋にそれぞれ恋人役の女性選手が五人ずつ！ 先に進み、時間が経つと後ろの選手が前に進んできます！ 最悪、最後の部屋では男性一人に対して女性二十人というハーレム状態に！ 無事逃げ切れるか！ それとも、掴まって浮気のお仕置きに男の大事なものを女たちに寄ってたかって集中攻撃か！」

「今回は設定試合！ 設定は浮気がばれた男が恋人たちに袋叩きにされるというもの！ 四つの部屋にそれぞれ恋人役の女性選手が五人ずつ！ 先に進み、時間が経つと後ろの選手が前に進んできます！ 最悪、最後の部屋では男性一人に対して女性二十人というハーレム状態に！ 無事逃げ切れるか！ それとも、掴まって浮気のお仕置きに

**男の大事なものを
女たちに**

寄ってたかって

集中攻撃か！」

客が歓声を上げる。

客は女性限定。それも、いわゆるドSの女性ばかり——それは別に限定せずとも、こういう金的ありの男女格闘など特殊な趣味がない女性は来ない。

彼女らの期待は、当然男の肉玉が女性選手の手で粉砕されること。

それも、一度ではない。

試合は三分一ラウンドで十ラウンドに分かれる。

玉が潰れたらそのラウンドは終わり、ナノ薬ですぐ治療して三分のインターバルの後で次のラウンドに進むというシステムなので、最悪で……あるいは、客のドS女性にとっては最高で、だが、二十玉潰される場合もある。コンプリートと呼ばれる客にとって一番嬉しい展開だ。

いや、実はそれが一番ではないが、普通の展開ならまあそれが一番である。

田淵は、二十人の相手を見る。

皆、一様スポーツぐらいやった事があるらしい、歳からすれば細く動けそうな女たち。

しかし、格闘技の有段者とか、スポーツで結果を出したことがあるというのとは違う。

——なんだ、本当にただの主婦だな。

主婦であり、普段は観客。

相手はそういう素人女性だと聞いていたが、半ば田淵は信じていなかった。

「それでは、田淵選手にお話を伺いましょう」

「ああ、話すってほどのこともないけど……マイクとかいいの？」

「はい、天井をご覧ください」

言われてみると、何か釣り下がっている。

格闘場全体に、均等に吊り下げられているそれは、集音機だった。

「試合中のやり取りも聞こえるように、高性能の集音機が天井から吊り下げられています。だからマイク無しで普通に話しても、お客様に配られている観戦用のタブレットに田淵選手の声は届いていますよ」

「へえ、ハイテクだね。それじゃ話すけど……正直、ガッカリしたね」

「設定試合の舞台は確かに外から見るとちょっと安普請ですが、中は結構……」

「いや、選手だよ。あんたら、本当に普通の主婦だろ？」

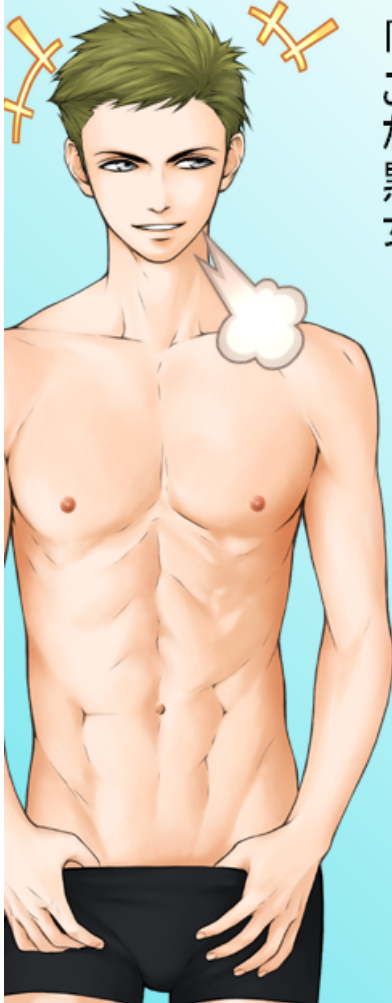
「そうよ。お手柔らかにね」

「そりゃ少しは加減するけど……でも試合なんだから多少の怪我は覚悟してもらわないと。でも、本当にただの主婦だなんてな。俺はてっきりそれなりに訓練してる奴が出て来るんだと思ってたよ」

「へえ、それじゃ、訓練した二十人相手に一人で戦うつもりだったの？」

「へ、訓練したっていっても、所詮女だからな」

「へ、訓練したっていても、所詮女だからな」
客のざわめきが止まる。



「ジャブ一発で黙らせられると思ってたけど、これじゃそれ以下だ。でも、ジャブ以下の攻撃もないしな。まあ、あんまり近付かなきゃ、黙って通ってやるよ」
女性選手たちが顔を見合す。

ついで、目を輝かせる。
「さすが、男らしいわ！」
「そうよねえ、女なんか二十人ぐらい、どうってことないわよね」
「へ、わかってるじゃんか。勝ち目ねえって」
「うふふ、でもこの試合はボクシングじゃないから……ねえ」
「そうよ、ね。うふふ、大事な所……男の人の **金の玉をね**」
「攻撃していいのよ？
流石にキ〇タマをやられたら……」
「やれると思ってんのかよ。キ〇タマ狙いこみでも、女の方がはるかに弱いんだよ」



客のざわめきが止まる。

「ジャブ一発で黙らせられると思ってたけど、これじゃそれ以下だ。でも、ジャブ以下の攻撃もないしな。まあ、あんまり近付かなきゃ、黙って通ってやるよ」

女性選手たちが顔を見合す。

ついで、目を輝かせる。

「さすが、男らしいわ！」

「そうよねえ、女なんか二十人ぐらい、どうってことないわよね」

「大体、始めは五人ずつだし」

「へ、わかってるじゃんか。五人がかりだったって、俺が無抵抗でも倒すのにどれだけかかる？ こっちは五回も殴れば終わりなんだぞ。勝ち目ねえって」

「うふふ、でもこの試合はボクシングじゃないから……ねえ」

「そうよ、ね。うふふ、大事な所……男の人の金の玉をね」

「攻撃していいのよ？ 流石にキ〇タマをやられたら……」

「やれると思ってんのかよ。大体、戦場じゃキ〇タマありなのは当然。それでもキ〇タマ狙いの女が大活躍なんて話聞いたことないだろ？ キ〇タマ狙いこみでも、女の方がはるかに弱いんだよ」

言ってから、流石にしまったと思う田淵。

別に、相手を怒らせたり、嫌な思いをさせる意味はないのだ。

適当にあしらってグルリと四部屋通り抜けるのが一番利口なやり方。

——ヒステリー起されたら面倒だぞ。まあ、試合がはじまりゃ関係ないけど。

わめき散らされるのを覚悟する。

が、主婦たちはむしろ嬉しそうだった。

「まあ！ 凄い自信ね！」

「さすがプロボクサーね！ 憧れるわ！」

「確かにそうそうキ〇タマ攻撃なんて上手いかわいいわよね！」

「やだ、簡単にやられちゃうかも」

ヒステリーを起されなくてよかった、と思う。

思う反面、何か馬鹿にされている気がする。

「おいおい、簡単にキ〇タマやれると思ってんのか？ あ、そうか、足の方が手より長いから、先に届くってんだな？」

「あら、そんなこと別に」

「ボクサー相手に簡単に蹴りなんて……大体、素人よ私たち」

まあ、その通りだ。

彼女らはまったくの素人。

喧嘩の経験すらない。

ただ、この地下闘技場での試合は何度もやっている。

初めての者もいるが、半分以上は経験者で、どう戦うべきか打ち合わせしていた。

その自信に、少し不安になる田淵。

だが、ジャブ一発で倒せることは確かだ。

それは別に田淵が勝手に考えているわけではない。

事実として、もし二十人の女性選手が一人ずつボクシングで向かってくれば、田淵は二十発のジャブで全員気絶させることが出来る。

戦力の差は圧倒的だ。

それでも、試合を組んだ側は女性選手が勝つカードを組んだつもりなのである。

「それでは、一部屋目の選手の入場です！ 念のために言いますが、中にあるものはすべて武器に使っていいですが、試合が始まるまでは触れてはいけませんよ！」

五人の主婦が部屋に入っていく。

部屋にはそれぞれ二つずつ外から入る扉がある。

セコンド扉と呼ばれていた。

「さあ、がんばってください！ 金ちゃんには気をつけて！」

「当たり前だよ。こちら生まれつきぶら下げてんだから」

赤い髪の女性の尻をオープンフィンガーグローブをつけた手で撫でつつ、笑う田淵。

——うわ、またセクハラ。こいつほんとにクソね。DVもやってるし……キ〇タマ潰されて来なさい。

ニコニコしながら、セコンドの千田千秋は心の中で毒づく。

借金の肩代わりを申し出に始めて接触したときから、田渕はずっとこの調子だった。

お茶を出してくれた恋人の顔にアザがあるのも、「躰けてやった」などといいことをしたように語っていた。

その恋人の前でも、平気で千秋に触ってくるのだ。

田渕ががんばって戦うほど千秋にボーナスも入るし、奇跡的に男性選手初勝利となればもちろんさらにボーナスとなる——別に初勝利に賞金がかかっているわけではないが——だからまあ、がんばって欲しいとは思う。

だが、二十玉潰されてコンプリートで負けて欲しい気もする。

——ってというか、キ〇タマ潰されたらそれはそれで、田渕にも私にもボーナス入るから悪い話じゃないけどね。

玉を潰されれば、一つ十万、二個同時に潰されると五十万。

十ラウンドで毎回潰されれば五百万だ。

千秋にも一玉一万、二つで五万のボーナスがでる。

これはもちろん選手との信頼関係を崩さないために秘密であるが。

——コンプリートしたら借金一発でチャラ、って言ったらマジギレしたからねえこいつ。よっぽどキ〇タマがかわいいのね。すぐ治るんだからいいじゃん、って思うけど。

玉が治る。

その事実は男にとっては「万が一潰れても助かる」であるが、一部の女にとっては「治るなら潰れていい」ということだった。

そしてごく一部の**猛者**にとっては「治るなら何度でも潰されることが出来る」ということでもあった。

そんな**猛者**はあまりいないが。

田渕が部屋に入っていく。

「ああ、家具とかも武器に出来るんで、気をつけてくださいね」

「平気だよ」

いい加減な返事に肩をすくめる千秋。

普通の選手になら、もう少し熱心に言う。

が、聞く気があまりないセクハラDV野郎にはさらにしっかりとした注意喚起をする気にはなれなかった。

田渕が部屋に入ると、安普請のセコンド扉が閉じられ、鍵がかかる。

窓が開いていて、セコンドが中を見れる構造だ。

部屋の中は、フローリングの居間というか食堂という感じ。

真ん中に、どう考えても戦うのに邪魔になる長机。

その机があっても、開いている空間は十分暴れられる広さがある。

普通のマンションの部屋の作りではあるが、広さは桁違いということだ。

多くのカメラが設置されていて、観客はタブレットで見れるし、天井がないので直接見ることも出来る。

普通の試合より見づらいが、見て見えなくはない。ただ、客席の位置によっては他の部屋が邪魔で見ない事もあるが。

部屋の中に、主婦五人。

奥に台所のような空間もあった。

そこにレフェリーがいた。

「さあ、試合開始です！」

「浮気してたわね！ 許さないわよ！ キ〇タマ潰してやるわ！」

女性選手が叫ぶ。

「へ、じゃあぶん殴ってやるよ。顔の形変わるまでな」

別に演技ではなく、そういう人間である田渕。

女性選手たちの顔が引きつる。

田渕が本気で、今までそういうことをしてきたらしい事が本能的に理解できたのだ。

「これは本気でいける相手ね」

「そうね、キ〇タマ潰してやりましょう。……まあ元からその気なんだけど」

「言ってる！ 女の癖に……男に勝てるわけないってことわからせてやる！」

机の向こうの女性選手に向かおうとする田渕。

余裕の歩きである。

と、女性五人が一斉に動く。

机に取り付いて、押す。

「え？ ぐっ」

慌てて走り出す田渕だが、すぐに机で腹を押され、壁に押し付けられる。

「え？ ちょ……マジ！？ 何だこれ！」

二人が押すのをやめ、三人の女性が押す。手を伸ばして全力で。

青ざめ、またすぐに顔を真っ赤にして、唾を飛ばす田渕。

「ちょっとまで！ 卑怯だぞ！」

「中にあるものは何でも使ってよいのよ。聞いてなかった？」

「き、聞いてたけど……それは椅子で殴ったりとかだろ！？」

言いつつ、机を押し返そうとする。

今押してきているのは女性三人。

体格がよく鍛えている田渕なら押し返せる。

普通の男でもなんとかかなるかもしれない。

が、それは同じように腕を伸ばして、足の力をそこに乗せたらの話。

相手がそうしているのに、力の入らない形ではさすがに押し返せない。

「くそ！ でもこれじゃそっちも攻撃できないだろ！ 来たらぶん殴れるからな！」

机を押し返すのをやめ、拳を握って構える田渕。

——油断した！ 道具使えると聞いてたのに！ だからお互い指が使えるグローブだったのに……
でも、こんな状態のジャブでも女ぐらい……

素振りをする。

「こんにちわ！」

急に女の声が掛けられる。

急に女の声が掛けられる。

周りを見る田渕。

いない。

いや、机の上からみえる場所にはいない。

いるのは、机の下。

田渕の手が机に遮られて届かない所にいた。

「……ず、ずるすぎる」

震える。ムニュ、と手で揉まれていた。

男の男である証明、太股の間の、

女にはない臓器一式を。

机の下に、女二人が潜っていた。

田渕の手は机の上。

足は動くことは動く。

だが机と壁で腹を挟まれ、蹴りどころではない。

膝の前にくれれば、

膝蹴りのような形は出来るというだけ。

それも、下が見えないのでタイミングなど計れない。

それはもう、敵である女たちに

男性器を思い通りにされる

ということだ。

「さあ、タマタマにお別れするのよ」

周りを見る田渕。

いない。

いや、机の上からみえる場所にはいない。

いるのは、机の下。

田渕の手が机に遮られて届かない所にいた。

「……ず、ずるすぎる……」

震える。

ムニュ、と手で揉まれていた。

男の男である証明、太股の間の、女にはない臓器一式を。

机の下に、女二人が潜っていた。

田渕の手は机の上。

足は動くことは動く。

だが机と壁で腹を挟まれ、蹴りどころではない。

膝の前にいてくれれば、膝蹴りのような形は出来るというだけ。

それも、下が見えないのでタイミングなど計れない。

それはもう、敵である女たちに男性器を思い通りにされるということだ。

「さあ、タマタマにお別れするのよ」

選手の誰かの声が、田淵には地の底から響いてきたように思えた。

体験版終わり

これから田淵はどうなってしまうのか！？

もちろん去勢の嵐です。

一発殴れば一人を倒せる猛者である田淵。

しかしその一発をそもそも出せるチャンスを与えられず、

主婦たちのキ〇タマ責めで沈んでいきます。

続きは製品版で